心肺蘇生法に神様は必要か？

　それからの事を、俺はよく覚えていない。

　ただ気が付けば、俺はマンションの近くにある公園のトイレの個室の中で、グッタリしていた。あまり地面が綺麗では無いのも気にせず、俺は地面に座り込んで、便器に寄りかかる。一応明かりはついているが、それでも薄暗い。さっきのあいつを見たばかりなので、非常に不気味だ。

　息も絶え絶えで、呼吸が苦しい。足も痛いが、空っぽの胃から何かが逆流してくる感覚を抑えるのが辛かった。

　手にはもう、スーパーの袋は無い。どうやら、ここまで来る間に落としてきたようだ。

　それでも、俺はまだ生きている事を実感する。だんだんと落ち着いてきた。

「ま……撒けたか？」

　ようやく声が出るようになった俺は、未だ鞄の中で無言を貫いている妖精モドキに聞く。返事は無い。

「……おい！」

　不信に思って中を見ると、妖精モドキは目を回して気絶していた。髪や服……じゃなくて体の一部がひどく乱れているところを見ると、中で大分エキサイティングに転がっていたらしい。どうやら、俺はよほど鞄を無茶苦茶に振りながらここまで来たようだ。

「……うぅん？」

　そんな事を思っていると、妖精モドキは目を覚ます。ヨロヨロと起き上がり、目を擦りながら俺の事を見上げてきた。犬が水を払う時のようにブンブンと頭を振り、背中の銀翼を広げて鞄の外へと浮遊する。

「……ここは？」

「公園のトイレの中だ」

　物珍しそうに辺りを見渡しながら聞いてきた妖精モドキに少し呆れつつも、俺は答える。

「……っ！　そう言えば、テュポーンはっ？」

　ハッとしたような声を出して挙動不審になる妖精モドキ。その顔は、どこか怯えたような色が見えた。

　聞きなれない言葉につまづくも、それがさっきの下半身が蛇みたいな奴の事だと気がつくのに、そう時間はかからない。

「……知っているみたいだな」

「……うっ」

　少し語気を強めると、こいつはバツの悪そうな顔をして俯く。

「話せ。一体奴は何者だ？」

　そう聞きつつも、実は俺には少し想像がついていた。『こちらの世界に被害が及ぶ』と言うのは、きっとあいつみたいな奴が俺の世界にやって来ることを言っているのではないだろうか？

「……もしかしてお前等、追われているのか？」

　俯いたまま何も言わない妖精モドキに、俺は質問を変える。そう言えば、こいつは探している人物を『護衛対象』と呼んでいた。きっとこいつと同じように名前はないのだろうが、それでも何故『護衛』という単語が出てきたのか、少し疑問があったのだ。そこにマンションの近くにいたあいつと、怯える妖精モドキ。結びつけると、出てくる答えはこんなところだろう。

　案の定、今まで挙動不審だったこいつの様子が、明らかに変わった。

「……はい」

　聞き取れるか微妙な声で、こいつは呟く。

「まさか、こんなに早く追いつかれるとは思っていませんでした……」

「もう一度聞こう。奴は何者だ？　いや、人じゃ無いから、『何者』って言い方はおかしいか……」

　もう一度同じ事を聞くと、さっきとは打って変わってちゃんと説明を始める。その目は、諦めが半分と、決意が半分といったところで、それがやけに俺を不安にさせた。

「あいつはテュポーン。私達を殺そうと追ってきた奴です。冥府にある『タルタロス』という所に閉じ込められていた、化け物……とでも言えばいいでしょうか？　まぁ正確には、化け物の手下ですが」

「……『手下』、か。あいつからも、随分とやばそうな雰囲気が伝わってきたが」

「……あんなの、下っ端中の下っ端ですよ。それでも、私やあなたでは手も足も出ないでしょうが」

　そう言われて、俺は黙りこくる。まだ聞きたい事はあるのだが、言葉に出せなくなってしまった。トイレの入口から入る風が、俺達の頬を撫でる。

「……どうするんだ？」

　やっと出てきた言葉は、実に人任せなものだった。それに気が付いた俺は、慌てて首を横に振る。

「……悪い。お前にも、どうしてみようもないよな？」

　妖精モドキは、唇を噛んで頷いた。握りこぶしに力が入っているのが、傍から見ても良く分かる。よほど自分で対処出来ない事が悔しいみたいだ。

「せめて……」

　出てきた声は、震えていた。

「せめて……誰か一人でもいてくださったなら……」

　それがどういう意味なのか、俺には分からない。それでも、俺はそれについては聞かなかった。

「……本当に申し訳ございません」

「……何故謝る？」

「迷惑をかけるつもりは無かったのですが……奴が来た以上、それは叶いそうにありません。おそらく奴は、この世界の人々を無差別に襲うでしょう。私達を探し出すために、邪魔な障害は力で取り除こうとするはず」

「マジか……」

「そうならないよう、奴を食い止めたいのは山々です。しかし何をしようにも、今の私に出来るのは、他の手下が来る前に、一刻も早く私の『護衛対象』を見つけることくらいしか無いのですよ」

　なるほど……奴も探している人物が見つかれば、この世界に用は無いだろうからな。俺達がそいつをさっさと見つけて、あの化け物の前に放り出してしまえば、何とかなりそうだ。

「……行きましょう。こうしている間にも、奴は行動を始めています。被害が大きくなる前に、早く見つけなければ」

「……意外と冷静だな」

　ボソッと呟いた俺の一言に、扉の近くに行こうとした妖精モドキが振り返る。

「普通はさ。『あなたを危ない目に合わせるわけにはいきません。ここからは私一人で行動します』とか言うもんじゃないか？」

「……すみません。配慮が足りませんでし――」

「いや、言わなくて正解だ。俺も一緒に探すほうが、結果的にこの世界の人達にとって得になるんだ。お前が何と言おうと、俺は一緒に探す」

「……ですが――」

「案外、お前もそこら辺をちゃんと理解しているもんだと思ったからな。それで『冷静だな』なんて言ったんだが、もしかして違ったか？」

「……うぇ、え……ええっと」

　どうやら違ったのか、途端に慌て始める妖精モドキ。こんな状況だが、そんなこいつが面白くて、俺はついプッと吹き出してしまった。

「す、すいません……」

「悪い。そう落ち込むなよ。ああ、そうだ。こんな状況だし、お前も人の目に触れたくないとか言っている場合じゃ無いだろう？　人手を増やすか？」

「……そうですね」

　少し考える素振りを見せた後、妖精モドキは頷く。

「ですが、協力してくれる人がいるでしょうか……？」

　こいつの心配も最もだ。実物を目にしていなきゃ、ここまでの話はとても信じてはくれないだろう。

　だが――

「大丈夫だ。人を探すのに協力してもらうだけで、あいつに関してはノータッチを貫くつもりだしな」

　それならば、説明するのも楽だ。面倒なら最悪、適当な事をでっち上げてもいい。俺達の最優先事項は、妖精モドキの『護衛対象』を探すことだからな。それさえ何とかなれば、後は問題ない。

　そう思った俺は、知り合いに連絡しようとスマートフォンを取り出す。

しかし、そこで気が付いた。

「……参ったな」

　電話帳を開いてみたが、登録されているのは親だけだった。そう言えば、今まで誰とも電話番号とかメールアドレスとかを交換した記憶は無い。

　流石に海外にいる親に協力させるわけにはいかないだろう。どう考えても見つかる気がしない。

「……どうなさったんですか？」

　顔をしかめる俺を不安に思ったのか、怪訝そうな声を投げかけてくる妖精モドキ。俺は慌てて笑顔を取り繕い、スマートフォンをしまった。

「い……いや、どうも他の人の手は借りられそうも無い。仕方ないから、俺達二人だけで探そう」

　そう言って、俺は扉を開けた。周りに細心の注意を払いつつ、俺は入口へと戻る。その後ろから、フワフワと妖精モドキが付いてくるが、俺と同じように周りに注意をしていた。

　しかし、そんな俺達も、まさか――

　トイレの屋根に、あのテュポーンがいるとは思っていなかった。

「――！」

　俺に飛びかかってくるテュポーンと、その間に入って両腕を広げる妖精モドキ。

　その妖精モドキを払いのける俺の腕。

　そんな妖精モドキに心で何か伝える俺の思考回路。

　そんな俺の鳩尾にめり込むテュポーンの右腕。

　あまりにも色々な物が飛び込んでは消えるので、何が起こったのか一瞬分からなかった。

　だが、気が付けば、俺は夕方の時と同じように、視界をブラックアウトさせていた。

　妖精モドキは、そんな瞬の様子を視界に捉えていた。その目は告げる。

　『お前は死ぬな』

　恐らく、彼は悟ったのだろう。この世界にとって、自分よりも事情を知っている妖精モドキの方が生き残った方が世界にとってメリットがでかい、と。

　だが、それを理解した頃には既に、瞬の心肺は停止してしまっていた。

「――えっ？」

　妖精モドキはその瞬間、何を考えたのか分からない。とっさに彼を助けようとしたら、彼が自分を払い飛ばしたのだ。目の前で瞬が倒れた事を、妖精モドキは現実の事だと認識出来なかった。これが二回目であるにも関わらず。

「なん……で……？」

　声は掠れていて、宵闇に吹く風に消えていく。

　自分が不用意に巻き込まなければ、彼は、ゼウスが取り戻した命が、失われる事は無かったのではないか。そう思った時にはもう、全て終わった後だということに、ようやく妖精モドキは気が付く。

　メリットを踏まえても何故、彼は自分を助けたのだろうか。妖精モドキにはそれが分からなかった。理解しようとしても、頭の中がぐちゃぐちゃになっていた。断片的に浮かんでは消えていく、今日の出来事。

「あ……あぁ……」

　ぼんやりとした明かりの中でも、テュポーンは妖精モドキのことをしっかりと見つめている。自責の念に駆られる暇を与えること無く、テュポーンは確実に標的との距離を縮めていた。

自分の感情が整理出来ないまま、妖精モドキは尻餅を付きながらも、後ろへと退いて行く。だが、それも限界だ。既に、テュポーンは妖精モドキとの距離は一メートルあるかないか、といった所で、その距離も確実に縮んでいる。

ここで初めて妖精モドキは、テュポーンが鎌になっている左腕を自分に振り上げている事を知った。

そして同時に――

瞬の体が黄緑色に光り輝き、その光が瞬の体の上空へと舞い上がって人の形を作っていくのを。